

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2012～2016

課題番号：24500721

研究課題名（和文）オリンピック冬季大会の環境レガシー

研究課題名（英文）The Environmental Legacy of Winter Olympic Games

研究代表者

三浦 裕（Miura, Yutaka）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50142774

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、過去の冬季大会に関する文献について検討を行い、将来的にも持続可能なオリンピック冬季大会のあり方について環境レガシーの観点から明確化することを目的とした。

その結果、競技大会が後世にわたって支持・開催され続けるためには倫理的・教育的な観点から検討された大会のレガシー設定とそれに基づく施設づくりや大会運営が必須であり、またそれらを共有し合える場の確保が重要であるとの結論を得た。

研究成果の概要（英文）：In this research, the literature about the past winter convention was examined and it aimed at clarifying from a viewpoint of environmental legacy about the state of the sustainable Olympic Winter Games also in the future.

The result is as in the following; in order to continue doing support and holding of a game convention over future generations, the legacy setting of the convention examined from an ethical and educational viewpoint, and the production of an institution and convention management based on it are indispensable, and the security of the place to share them and to toss is important.

研究分野：体育科（スポーツ）教育学

キーワード：オリンピック（冬季）大会 レガシー 自然（スポーツ）環境 体育理論 フェアプレー 関心，思考  
・判断，知識・理解

## 1 研究開始当初の背景

一般にオリンピックと言えば、華やかな競技場面や新記録の紹介、そして国別メダル獲得数などがテレビ・新聞等による報道の中心となっている。確かに、これらの結果は史実に残る記録として重要である。しかし、同時に近年では大会開催にともなう財政負担のあり方や自然環境に対する影響などが問題視され始めてきている。

特に、冬季大会の競技は直接的に冬の自然の環境の中で実施される種目が多いため、大会開催に当たっては入念に計画されなければならない。加えて、現在では夏季大会についても同様の観点から検討が行われているのが現状である。このため、よりよいオリンピックを目指すためには、当然のことながら、これらに対する十分な検討と対策が必須であることは言うまでもない。

しかし、このような現代的な課題に対する考え方や具体的な方策については、本来大会の環境計画に事前に盛り込まれるべき内容であるものの、判断とはしていない。つまり、オリンピック大会に関する財政や環境等についての基本的な理念や施策等については、一般人が理解しやすい内容として還元されていないと言うことである。このような状況では当然十分とは言えないし、さらなる課題も表出してきている。

## 2 研究の目的

本研究においては、今後のオリンピック冬季大会のよりよいあり方を探るため、過去の冬季大会について整理・検討を行うとともに、将来的にも持続可能な冬季大会のあり方を探るべく、倫理的・教育的観点からみた冬季大会の環境レガシーの明確化の必要性について明らかにすることを目的とした。

## 3 研究の方法

本研究の目的を達成するため、国内外におけるオリンピック(冬季)大会に関する文献

を収集し、整理・検討を行うとともに、関連する領域の専門家へのインタビュー調査も実施した。

## 4 研究成果

### (1) 環境問題からみたオリンピック冬季大会について

環境問題については、まず初めに国内外における冬季大会開催による自然環境への影響を挙げる事ができる。このことについて報告者は、オリンピック冬季大会と環境について発表を行っている。その結果、IOCによる「環境(environment)」のとりえは「自然環境」であり、「スポーツ環境」としての施設や用具、観客などが含まれてはいないことが明らかとなった。

J.-L. Chappellet<sup>3)</sup>は1984-2000年までに開催された冬季大会の問題点について報告しており、財政や社会文化的な問題の他、自然環境への影響についても指摘している。この中で、札幌大会やデンバー大会については環境危機(environmental criticism)が生じた大会としてはいるものの、主要な問題点としては財政的問題を挙げ、環境への影響の研究は1980年のレークプラシッド大会から始まったとしている。しかし、この論文が発表された2003年の段階では既に日本において札幌大会の自然環境問題が、認識され始めていた。したがって、この報告は冬季大会に関する英文論文の内容を総括したものであり、それ以外の問題点についての検討や内容に関する実地検分・再調査等の検証は行っていないと推測される。

このため、本研究においては卑近な札幌冬季大会を事例として検討を行った。札幌大会においては、伐採した樹木や植物の総量あるいは資材や施設建設のためのエネルギー消費量等は記録されていない。当時は、現在のように詳細に環境について検討することは少なかったようである。しかし、実際にはア

ルペンスキー会場として、支笏洞爺国立公園内の樹木が伐採されており、復元するために移植された樹木もあるものの、専門家によれば原状回復には200-300年かかると言われている。一方、ソチ大会では大会開催に関わる樹木の伐採や道路・施設建設の酸素消費量を概算し、大会開催による酸素損失を回復させるために50年後まで緑を増やす方策を実施したとの報告がある。

次に、環境問題として大会開催時に建設・使用された施設を挙げることができる。札幌大会の施設（コースも含む）の場合は、本研究が開始された2012年度以前に調査済みであるが、既に大会施設は撤去あるいは放置された状態のままであり、とても大会が開催できるような状態ではなかった。この年代は既に長野大会が終了した時期であり、国内・国際大会は長野会場で実施されていた。つまり、札幌大会の施設は予算措置もされないまま継続的な使用は不可能な状態となり、札幌大会の歴史はこの時点で線が消え、歴史的には点としての記録となってしまった。

## (2) 大会遺産（レガシー）について

大会遺産とはその名が示すように遺産であり、それは通常大会終了後に明確にされる性質をもつが、現在ではレガシーは事前の大会招致時点で設定することが必要とされている。なぜなら、レガシーとは大会終了時の一時的なスローガンではなく、基本的に後世にわたって保持されるべき（文化的）遺産という見方が強まってきたからである。

このことは、「なぜ」大会招致が必要なのか、あるいは「どのような」大会をめざしているのか、そして大会は「なに」を残すのかといった内容と密接に関連しており、競技大会がオリンピック・ムーブメントの4年間のまとめの一区切りであるとするオリンピック憲章に則っている。また、このレガシーをどのように設定するのかによって、施設の建設や大会運営にも大きな影響を与えること

となり、ひいては財政の問題とも絡み合う問題となる。したがって、大会を招致する各組織員会が将来にわたって保持されるべきレガシー、特に冬季大会においては環境レガシーについても明確化することが必須である。

しかし、どのような内容のレガシーが適切なものかについては現在のところまったく明らかにされてはいない。具体的な文字表現は競技大会を開催する都市や地域の実情が毎回異なるため一様ではなく、またそれを固定化することに意味はないが、盛り込むべき要素としては、まず現在問題とされている「環境」は必須であると言える。また、オリンピック競技大会は世界最大級のスポーツ・イベントであることから、「スポーツ」としての要素も必須である。そして、3つ目の要素としては開催地域の理念（ねがいや理想）が考えられる。ただし、これらが単独にしかも個別に存在しては一貫性がなく捉えづらいうえ、折角設定したレガシーの真意を十分に伝えきれない。したがって、レガシーにはどのような意図や理念を盛り込むのかが重要なポイントとなる。

## (3) 倫理的・教育的価値をもつ環境レガシーの必要性

これまでオリンピック大会は基本的に、開催を是とする見方が多い。その理由は多種多様であるが、実際のオリンピックにはさまざまな問題点が生起しているのも事実である。しかし、環境レガシーの必要性を訴える文献もなく、またどのような観点や価値をもつべきなのかについての検討も行われていない。

過去の冬季大会開催地の実情を知るため、国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割に関する研究を行った。カナダのオリンピック・スクール・プログラムでは、オリンピック選手自身を題材としているのみであった。競技の内容を対象としている訳ではなく、オリンピック教育としての道徳的な観点を取り上げている。

同様の観点から、札幌大会時に市内の中学校に配布された「オリンピック学習の手引き」についても検討を行った。保健体育では大会の「正面」としてスポーツのもつ教育的な意義について取り上げているが、「負の面」については記述されていない。1964年の東京大会時においても、同様の傾向であった。したがって、各組織委員会そして直近の冬季大会開催国においてさえ、「正面」しか取り上げておらず、環境レガシーには触れていないことが分かった。今後も持続可能な冬季大会を目指すためには、一般市民の理解と共感が必要不可欠であるとともに、そのためには現在生起している種々の問題点を解消する可能性のある倫理的・教育的な観点から検討された環境レガシーを設定する必要性を指摘することができる。

#### (4) 環境レガシーの設定について

どのように環境レガシーを設定するのかについては、いくつかの方法が考えられる。その場合、大会開催地域の住民の理解を得ることを念頭に置かなければ、その方策を教育において実施する方法が有用である。

このため、中学校学習指導要領の体育理論領域に「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な意義や役割」として「オリンピックなどの国際大会」の項目が新規に設定されたことを受け、この授業における環境レガシーの学習について検討を行った。

現在の学習指導要領における目標・評価の観点は、「意欲・関心・態度」、「知識・理解」、「技能」、「思考・判断」という4つの観点から構成されている。体育理論は教室での授業であるため、「技能」の観点は設定されていない。これらの配分のウエイトは異なるものの、上記3観点が相互に関連し合ってよりよい学習を進めていくことが求められる。しかし、前出の資料のように「正面」のみを意図した学習で十分であろうか。つまり、「負の面」の周知や改善の検討については「暗黙

の了解」でよいのかといった問題である。「正面のみの黙認」であれば「意欲・関心・態度」や「知識・理解」といった2観点に留まることになり、「思考・判断」の観点は含まれない。これは従来型の授業の特徴であり、いわば知識として教え込む授業である。「思考・判断」を育てるためには対象とされる学習内容について考えること（思考）が必要であると同時に、どのようにとらえるかについての判断をしなければならない。つまり、「正面のみの黙認」であれば、そこには「思考・判断」は伴わないことになる。

このため報告者は、体育理論の授業研究について検討を行った。これら一連の研究は、教員が事前に踏まえておかなければならぬ指導者としての基礎的知識や授業づくりの基礎的理解について検討したものであるが、具体的な授業づくりには至ってはいなかった。このため、引き続き報告者は現在の日本の学習指導要領に照らし合わせて、フェアプレーをキーワードとして授業に関する検討を行った。対象は中学生であり、体育理論授業の具体的な内容は「オリンピック大会にはもちろんよいところもあるが、実際には多種多様でしかも複雑な関わりをもつ問題も多数起きている」という事実を思考のための材料として提供し、それを理解した上で、さまざまな意見を聞きながら、大会開催をどのようにとらえるのかといった生徒自らの判断を各自意見としてもちえることが重要であるという主旨に基づく。このことは、レガシーの倫理的・教育的価値の判断とも言える。

#### (5) おわりに

これまでオリンピックに関する研究は、主として選手の競技力向上を目的とするものが多かった。しかし、オリンピックの内容はそれに終始するものではない。現実的に、特に冬季大会は正面と負の面の両面を有し、一般市民にも確認がされやすい。オリンピックが後世にわたって支持・開催され続けるた

めには、一般市民の賛同が必要最低限の条件である。このためには、市民に理解・支持される大会のレガシー設定とそれに基づく施設づくりや大会運営が必須であり、またそれらを市民自らの意見として共有し合える場の確保が重要である。

この点において、現在の日本では、教育の中でオリンピックに対するとらえ方を身につけることが唯一の場面となっている。以上のことから、大会招致の前提として必要とされるべき大会のレガシーは、倫理的・教育的な観点から検討されることが求められる。今後は、このような考え方に基づく具体的な授業実践やその評価などについて検討を深めていきたいと考える。

#### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省, 「中学校学習指導要領解説」, pp.137-139, 2008, 東山書房。
- 2) Jean-Loup Chappellet, The legacy of the Olympic Winter Games : An overview, The legacy of the Olympic Games 1984-2000, International symposium 14<sup>th</sup>, 15<sup>th</sup> and 16<sup>th</sup> November 2002, Lausanne, pp54-66, 2003。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- 1) Yutaka Miura, The Olympic Winter Games and the environmental impact issues, 21<sup>st</sup> European Fair Play Congress proceedings book, pp.151-163, 2015。査読有り。
- 2) Yutaka Miura, Fair play in the physical education class -The handling of fair play in the Japanese guideline for junior high school course of study-, 20<sup>th</sup> European Fair Play Congress proceedings book, pp.61-63, 2015。査読有り。
- 3) Yutaka Miura, Fair play in the physical education curriculum, LASE Journal of Sport Science, 6-1, pp. 79-93, 2015, 査読有り。
- 4) 三浦 裕, 中学の体育理論としてのオリンピック教育の可能性, 体育科教育, 60-8, pp.40-43, 2012。査読有り。

[学会発表](計14件)7件を抜粋

- 1) 三浦 裕, よりよい「オリンピック文化論」授業の開発について-中学校用オリンピック読本製作の試み-, 日本スポーツ教育学会第36回大会, 2016.10.30, 和歌山大学(和歌山県・和歌山市)。
- 2) 三浦 裕, オリンピック(冬季)大会の教育的・倫理的価値の背景について, 日本体育・スポーツ哲学会第38回大会, 2016.9.11, 千葉大学(千葉県・千葉市)。
- 3) Yutaka Miura, The Olympic Winter Games and the environmental problems, 21<sup>st</sup> European Fair Play Congress, 2015.10.8, Baku(Azerbaijan)。
- 4) 三浦 裕, オリンピック冬季大会に関する諸問題とレガシー, 日本体育・スポーツ哲学会第37回大会, 愛知教育大学(愛知県・名古屋市), 2015.8.19。
- 5) 三浦 裕, 札幌オリンピック冬季大会招致について-体育理論「文化としてのスポーツの意義」単元の授業構想から-, 日本スポーツ教育学会第34回大会, 2014.10.25, 愛媛大学(愛媛県・松山市)。
- 6) 三浦 裕, オリンピック冬季大会と環境-IOCスポーツと環境・競技別ガイドブックにみる環境のとらえ-, 日本体育・スポーツ哲学会第35回大会, 2013.8.18, 明治大学(東京都・千代田区)。
- 7) Yutaka Miura, What “educational significance and ethical value” do sport have? -The class design of “the culture role which played by international sports events-” in lower secondary schools in Japan, 4<sup>th</sup> International sport business symposium, 2012.1.12, Innsbruck (Austria)。

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況: なし

取得状況: なし

[その他]

ホームページ等: なし

報道関連情報: 「札幌オリンピック」の解説, どさんこワイド, 札幌テレビ放送, 2012年8月

#### 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
三浦 裕 (MIURA, Yutaka)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 50142774
- (2) 研究分担者: なし
- (3) 連携研究者: なし
- (4) 研究協力者: なし

以上